

アルゲートオンライン

～侍が参る異世界道中～

4

touno tsumugu
桐野 紡

イエレミアス

マリアの元上司。性格が災いし、軍港シーバルに左遷された。

マリア

リキオーに仕える美女剣士。かつては王宮の騎士だった。

スヴェトラーナ

紫色の雑竜が人間に変化した姿。リキオーを追い続けている。

イエニー

水竜が人間に変化した姿の大人バージョン。

ハヤテ

リキオーに飼われている狼モンスター。体は大きい、性格は子どものように無邪気。

アネツテ

エルフの精霊術士。人攫いによって連れ去られたところを、リキオーに助けられる。

リキオー

VRMMO「アルゲートオンライン」の世界に、侍として転生してきた普通の青年。豊富なゲームの知識でチートに遊び尽くす。

レスター

大森林に住む青年。銃魔士という珍しいジョブを持つ。

1 銃魔士・その1

リキオーたち銀狼団は、アネッテの故郷であるエルフの里へ馬車を走らせている。

なんでも、エルフたちの心の拠り所である精霊樹が近年稀に見るほど弱まっており、その回復のために、アネッテたち癒し手の力が必要なのだとか。

アネッテの兄弟子である、弓術士のシュルヴェステルからそう要請され、リキオーたちは目的地へ急いでいた。

精霊樹は、今リキオーたちがいるモンド大陸西方の大森林の最奥、閉ざされたエルフの里にある。大陸のどこからでも見えるほどの巨樹で、道に迷った旅人はその位置を確かめることで助けられるという。また市井に生きる人々は、精霊樹によって大地との繋がりを感知取る。このように、精霊樹は人々の生活に深く関わっていた。

エルフたち精霊種は、さらに密接に繋がっている。精霊樹を擁する大森林では精霊種の働きが活発で、森の所々には精霊樹の力をたたえる泉があり、それは大地に癒しの力をあまねく与えている。しかしながら、その精霊樹が死に瀕していた。

精霊樹はあまりに巨大であるため、蘇よみがえらせるには里の癒し手が足りない。そのため、ヒトの間で暮らすエルフにも声がかけられた。それが今回、アネットと呼ばれた経緯である。

森の外から招集された癒し手は、彼女の他に三人。おっとりとした性格のエヴェリーナ（姉）と、勝ち気なクリスタ（妹）の姉妹。妖艶しやうえんな美女のユステイーナ。

こうして一路、エルフの里へ向かっていた銀狼団とエルフたち一行は、広大な大森林に入った。すぐにエルフの護り手の集団に取り囲まれ、検分けんぶんを受けた。と言っても、彼らが来ることはエルフの里側に伝わっており、どちらかと言えば歓迎に近い。

しかしこれは異例の処置であった。そもそも里のエルフたちには、次のような不文律ふぶんりつがあるのだ。曰く。

「里を出たエルフは、二度と故郷の地を踏むことは許されない」

それゆえ、ヒトの手に落ちて街に住むエルフたちは故郷に戻ることを諦めていたし、里のエルフたちはそんな彼女たちを忌むべきものとして扱うのが通例であった。だから今回の歓待を受けて、連れてこられたエルフたちは皆涙ぐんでいた。

アネットを迎えたのは、彼女の知己ちぎであるヨラナだった。彼女はリキオーを見るなり、彼を別の世界からやって来た「渡界者とがかいしゃ」と看破かんぱしたのであった。

リキオーは、そのヨラナのことをアネットにそつと尋ねてみた。

「えっと、この方が、その、エルフでありながら、精霊術士と賢者の力を持つとかいう人だよな？」
ヨラナのこととは以前にアネットから聞いていた。賢者の力を使えるエルフが存在すると教えられていたのだ。

アネットが不思議そうな顔をして問い返す。

「はい。でも、なんでマスターを渡界者と見破れたんでしょうね。以前に、イエニーさまにもばれてしまったことがありますか……」

「俺の目には、彼女の内面から溢あふれるパワーが見えたよ。やはり普通のエルフとは違うのだからな」

アネットによると、ヨラナはエルフの上位氏族である十三氏族の中でも特に位の高い、三氏族に所属するお姫さまらしい。詳しい序列については複雑な身分制度があるようだったが、とにかく相当偉いエルフだということはわかった。

そんな高位の方が迎えに来るとは、やはりこの帰郷は、ただごとではないらしい。

ヨラナと里の狩人たちが歩いて先導し、ユステイーナたちの馬車、リキオーたちの馬車がそれに続いて進んでいった。

御者台ぎしやだいでは、マリア、アネット、そしてリキオーの銀狼団の三人が並んで座っている。

しばらく馬車の中で揺られていると、マリアが突然思い出したように質問してきた。

「そうそう、聞いておきたいことがあったんだ。さっき姉さまは、『イエニーさま』という名前を言っていたが、そのイエニーさまというのは、いったい誰なんだ？」

「マリアはまだお会いしたことはなかったわね。イエニーさまっていうのは、水竜さまのことよ。フェル湖を守護されている方で、マスターのことを気に入ってくださいているわ」

マリアが頬を紅潮させる。

どうやら「水竜」と聞いて興奮してしまったらしい。マリアはバトル好きで、強さを連想させる竜みたいな存在が好物なのだ。

リキオーは、またマリアの悪い病気が始まったと思い、ウンザリしながら彼女に告げる。

「イストバルの家に戻ったら挨拶に連れてってやる。どうせ一度、報告に伺う予定だったからな」

「絶対だぞ！」

マリアはワクワクが止まらないといった面持ちだ。鼻息まで荒くなっていた。

そこへ、アネットが尋ねてくる。

「え、マスター、報告というのは？」

イエニーさまに報告をしなければならぬことがあるとは聞いていなかったからだ。アネットはちょっと心配そうにしている。

リキオーがぶつきらぼうに答える。

「ああ、ワープゲートポータルを開通したからな。この手のことを詳しく知っているのは、真竜族

の方たちだけだろう。それに、ちょっと尋ねておきたいこともあつてな」

この世界の絶対者たる竜たちが、ゲートの存在について知らないはずがない。

なぜゲームでプレイした『アルゲートオンライン』とは違い、この大陸にはゲートが一つしかないのか。

この疑問の答えを知るのは、おそらく真竜族をおいて他にはいないだろう。

また、王都の御前試合に現れた紫色の雛竜のことも相談しておきたかった。どうやら付きまとわられているようなので。

そんなことを考えていると、突如として衝撃が走った。と同時に、雷のような巨大な破裂音が響きわたる。

一発目が聞こえてから、しばらくしてもう一発。

誰もが足を止め、音のした方向を振り向いて固まっていた。

一番驚いていたのは、リキオーであろう。

その音は、彼が元の世界で聞いたことのある音だったのだから。

そしてそれは、決してこの世界で聞こえるはずのない音だった。

「う、嘘だろ……」

紛れもなく、それは銃声だった。

もちろんリキオーも銃声を生で聞いたことはない。しかし映画やテレビなどを通して、あの独特

の乾いた音に、確かな聞き覚えがあったのだ。

一発目は何かの間違いかと疑っていたが、二発目で確信に至った。

ヨラナが慌ただしく問いたです。

「何なのだ！ 今の音は」

「森で、何か異常なことが起きているようです！」

そう返答したエルフの狩人が、ヨラナの周りに立って警戒を強めた。

ヨラナはエルフのお姫さまである。彼女に何かあつては護衛としての面目が立たないのだ。ヨラナも自分の立場をわきまえており、無闇に飛び出したりしなかった。

そこへ、シュルヴェステルが馬車から降りて現れる。

「私が様子を見に行こう」

彼はそう告げると、ヨラナにうなずいてから馬車を降りた。そして単身、音のしたほうへ飛び出していく。

リキオーは騒然とするエルフたちを尻目に、状況を冷静に把握しようと努めていた。

森全体がざわめいている。

この雰囲気は、ただごとではない。

ハヤテがピンと耳を立てて体を起こしたので、リキオーは彼の頭を抱えて押さえた。今にも飛び出しそうだったからだ。

マリアとアネットは、リキオーを見つめて指示を待っている。

普段はどこか頼りない主人であるものの、彼の知識や戦闘に関してのセンスに、彼女たちは信頼を寄せていた。

ついにリキオーが告げる。

「マリア、アヴァロンアーマーに着替える。出番があるかもしれない」

「わかった」

「アネットも」

「はい」

二人は御者台から奥へ下がり、それぞれ準備を始めた。

ハヤテはリキオーに首根っこを押さえられてフウフウと息を漏らしている。彼だけが求められていないようで不満そうだ。

「ハヤテはまだ出なくていい。どうせすぐに出番は来る」

そう言ってリキオーは、彼を宥めるように笑いかける。そして顎を撫でてやると、ハヤテは目を伏せておとなしくなった。

リキオーたちの前方で停まる馬車の中では、姉妹のエルフとユステイナが抱き合つて震えている。御者を務めていたアクセリは、馬車を降りて立ち尽くす。ただならぬことが起きたと皆が感じ取った。

まずは情報だ。状況が掴めないのでは滅多なことではできない。そう考えたリキオーは、馬車の前方で、困惑したままたむろしていた狩人たちのほうへ歩いて行った。

彼らは、リキオーを一目見るなり嫌な顔を向ける。

「何なのだ、お前は引つ込んでいろ」

「トラブルなんだろう？ 教えてくれよ。荒事なら俺たち冒険者がうってつけだぜ」

そこに、シュルヴェステルが戻ってくる。さっそく銃声の原因を突き止めてきたらしい。

彼も、その場にリキオーがいることに訝しげな表情を見せたが、そのまま無視してヨラナに告げる。

「ヨラナ。まずいぞ、ヒト族が山の守護者に手を出した」

「な、なんだと！ お、恐れ多いことを」

ヨラナが啞然として答えた。狩人たちの顔は蒼白になっている。

さらにシュルヴェステルが言う。

「守護者の片割れは、すでに命が危ないかもしれない」

「ば、馬鹿な……」

「それじゃ、精霊樹が助かるうが、お仕舞いではないか——」

エルフたちは呆然としている。

リキオーは、彼らの言葉から状況を察した。

とんでもない事態になっていることは確かだ。だが、出てきた単語と彼がゲームで知っているこの地域の情報とが結びつかない。

そもそもどうして大森林にヒト族がいるのか？ いたとしてもエルフの狩人に見つかからないで済んでいたということが信じられない。

そして、ヒト族が山の守護者を襲った？

山の守護者といえば、国内に四つある聖山の主である四神の「柱」だ。この森まで下りて来ているはずがなく、それに、そんなものを襲ったところでヒト族にはデメリットしかない。ますますわからなくなってきた。

困惑しながらも、リキオーはアネッテに尋ねてみる。

「アネッテ、山の守護者がいるのって……ここからだ西の聖山？」

「はい……」

彼女の顔も蒼白だ。

この大森林に接する西の聖山には「プリアレオス」という、雄と雌のつがいの守護者がいる。

プリアレオスは、ギリシア神話では百の腕と五十の頭を持つ巨人とされる。だが、『アルゲートオンライン』においては、いわゆるキマイラと同種のモンスターとなっている。

雄は非常に禍々しい造形で、恐ろしい戦闘力を秘めたモンスターである。固有名「タンゲニョースト」。

二本足で立ち、巨大な二枚の翼を持つ。首から上は獅子^{しし}で、背からドラゴンの首が生^はえている。足腰はミノタウロスを想起させ、尾は蛇^{へび}。その体にはメラメラと揺らめく灼熱^{しやくねつ}の炎を纏^{まと}っていた。前足は短いが、強大な魔力により、見えない爪が間合いのはるか外から襲^襲ってくる。

獅子の顔は「真実の目」という特殊スキルを持ち、敵対者のステータスを見抜き、ウィークポイントを攻める。翼によって巨体からは想像もできないほどの機動性を持つ。竜の首はあらゆる言語を理解し、消えることのない炎を吐く。

それら能力以上に危険なのは、尾の蛇の冷たい眼である。この眼が、タンゲニョーストのもつとも恐ろしい特殊攻撃である石化効果を持つ。さらに、体を覆う炎もただの飾りではない。触れたものを灰燼^{かいじん}に帰^きす炎獄^{えんごく}の炎である。

対して雌の「タンゲリスニル」は、雄とは対照的に、グリフォンの背に美女の上半身が生えた美しい姿をしている。攻撃能力をほとんど持たず、回復行動がメインで魔法防御が堅い。美女の額^{ぬか}には、「真理の目」という第三の目が備わっていた。

二体は同時に襲^襲ってくることが多いので、セットで戦うことになる。相手にする場合は、雌を先に倒すのがセオリーだ。

しかしながら、もっとと大事なことがある。四神を倒した場合、「森津波^{もりつなみ}」という現象を覚悟しなければならぬ。

森津波とは何か。

山の生き物すべてが狂^ま気に彩^{いろ}られ、突進してくる現象である。

そこには理性の入る隙^{すき}間^まもなく、ただ前進あるのみ。そして、山の狂^ま気が森に伝染し、山からすべての命が失われ、森の木々も失われる。

すべてが終わったあとには、瘴^{しやう}気^きに満ちた大地から魔物が生まれるようになるという。

まさに地獄の光景だ。

「これは確かにヤバイな……」

そうつぶやいたリキオーは、とにかく動こうと考えた。

打ち倒されたほうの守護者を助けて、つがいのもう一方の怒りを鎮^{しず}めてもらおうのだ。

果たしてそんなことが可能なかはわからないが、今は考えるよりも行動だ。

リキオーは、シュルヴェステルに声をかけた。

「シュルヴェステル、そのヒト族のところに連れて行ってくれ」

「何をする気だ」

「お前さん、まさか、このまますべてを諦める気じゃあるまいな？」

「……わかった」

シュルヴェステルは、目の前のヒト族の男にこの絶望的な状況をどうにかできるわけがないと思っていたが、今は藁^{わら}にもすがりたい気分だった。

リキオーが、彼を追ってすでに集合していた銀狼団メンバーに声をかける。

「行くぞ！」

「姉さま、私たちも行こう。ご主人がなにか思いついたんだ。私たちにはまだ可能性が残されていると信じよう」

「ええ、そうね……そうだわ」

マリアは蒼白な顔色をしたアネットの肩を抱いて、元気づけるように囁いた。こうして、銀狼団は森の奥へと進んでいった。

目当てのものはすぐに見つかった。メチャクチャに倒れた木の茂みの中で、巨大な獣が横倒しになっていたので。

その近くでは、意識を失ったヒト族の男が木に縛られていた。随分きつく縛りつけられたらしく、男はグッタリとしている。彼を縛ったのはシウルヴェステルのようだ。

倒れていたのは守護者の雌である。肩に弾痕があり、そこからドクドクと血潮を噴き出していた。

「守護者さまに……なんてこと……」

その様子を見たアネットは激昂した。が、ふううと息を整えて何とか平静を保とうとする。ここで自分が怒ったところで何も解決しないとすぐに考えたのだ。

リキオーは雌の守護者に近寄ると、その傷を確かめた。

流れ出す血からは、魔力の奔流が感じられる。

(ん……魔力が漏れ出しているのなら、まだ息があるということか。さすが四神の一柱だけあって、

そう簡単には死なないか。なら、まだやりようはある。しかし、この傷は——)

リキオーは、その傷口から不浄の毒に侵されているのを感じ取っていた。これではただ癒しただけではだめだろう。それにこの毒は——

「まさか、弾に？」

リキオーはそうつぶやくと、雌の守護者から離れ、立ち木に縛られた男へ近づく。

その足元には、銃らしきものが転がっていた。

見た目はライフルのような長銃の形。拾い上げると、肩が抜けそうなほどに重い。材質は、木でもなく鉄でもない。どちらかと言うと、石に近い物からできているらしい。

「どこに弾を込めるんだ？ それに火薬の匂いはしない……」

いろいろ弄っていると、トリガーらしき部分に蝶番があるのがわかった。そこを支点に真ん中から折れるようにして薬室が露呈した。弾倉はなく、一発ごとに弾込めをする構造のようだ。

撃った跡があるに違いないと考えたが、薬室内には薬莢はなかった。

もしかすると、弾に何らかのエネルギーを与えて撃ち出すのかもしれない。

リキオーは男に直接聞いてみようと考え、彼を起こしにかかった。

「おいっ、起きろー！」

パシパシと弱めに彼の頬を打つと、すぐに起きた。

「う、うう……うう……うっ……な、何だお前ッ……お、俺が、その獲物を仕留めたんだ！ 手を出す

なア」

男は少年というには歳を取っていて青年という感じである。彼は目を覚ますと、縛られていることに気づいて必死に暴れた。

そんな彼に、リキオーは冷たく告げる。

「あん？ 状況がわかってんのか。お前が仕留めたのは、山の守護者なんだぞ」

「そ、そうだつ、その肝があればこの森で一緒に住んでいる親父の病気が治るんだ。早く持つていかないと……うう、親父イ」

男の発言に、首を傾げるリキオー。

（肝？ この守護者のドロップアイテムに、そんなものあったか？）

ゲームの記憶では、守護者のドロップアイテムは槌だけで肝はなかったはずだが。何か情報が錯綜しているような印象を受ける。

男は激昂していたかと思うと、急にさめざめと泣き出した。

リキオーは呆れて、シウルヴェステルに話しかけた。

「シウルヴェステル、肝って言うてるけど、何のことかわかるか？」

「いや、わからん。というより、どうするんだ？」

リキオーはその問いには答えず、再び男へと向き直った。

彼は、ギリギリと奥歯を噛み締めて、憎そうな眼差しでリキオーを見つめている。

リキオーは、肝のことはひとまず置いておいて、銃について問いただしてみることにした。

「おい、質問に答える。この弾はどうやって撃ち出すんだ。まだ弾はあるのか？」

「な、なぜそんなことを……い、言えるか！ 我が家の一大事だというのに」

彼は答えようとしなかったが、その目は言葉以上に雄弁に語っていた。

彼の視線の先に鞆があり、その中にゴロゴロとした弾が何発か入っていたのである。

リキオーはその銅色の弾丸を手にとってみて、ある確信に至った。

「鉱毒か……」

大体の事情はわかった。

ならばやるべきことは、守護者の治療である。

それには、回復のブーストとなるような場所が必要だ。相手は神の一柱なのだ。アネッテ一人の力では、キツイに違いない。

「シウルヴェステル、この辺りに精霊樹の力が濃い泉のような場所はあるか？」

「うむ、精霊樹の枝を分けた魔力溜まりの泉が近くにあるが、それがどうしたんだ？」

「守護者をそこに移動させて治す」

「治すだど？ 守護者はもうあの通り……まさか、まだ？」

シウルヴェステルは目を剥いて、リキオーを穴が空くほど見つめた。

「ああ、何せ神さまだからな。そう簡単にくたばりはしないさ。じゃあ、さっそく運ぶぞ」

そう言うって、リキオーは横たわる雌の守護者に手を当てると、魔力を込めながら「セーブ」と念じた。雌の守護者の体は青い魔力で縁取られて光る。セーブはリキオーが考案した、形状を記憶するための生活魔法である。

守護者は五メートルを優に越す巨体。とてもではないが、そのままでは運べない。ハヤテでも無理だ。

それならば――

「よし、続けていくぞ、シェイプシフター」

苦笑交じりに唱えると、リキオーは鈍い頭痛を感じた。

シェイプシフターとは、対象のサイズを変える生活魔法である。これも、リキオーオリジナルの魔法だ。以前、ハヤテに使ったときは2しかMPを使わなかったが、今回はグングンと魔力を消費していく。

「マスター！」

アネットが気づいてリキオーに寄り添う。

そうすれば少しでも彼の負担を和らげられるともいう風に。効果は推して知るべしだが、リキオー的には嬉しかった。

(何をした？ それに魔法を使える……のか)

シュルヴェステルは、目の前で起きていることが信じられないでいた。

守護者の巨体が縮んでいくのだ。

そんな魔法聞いたことがない。渡界者だと聞いたが、一体何者なのだろうか。守護者の巨体は二メートル程度にまで小さくなった。

「こんなもんか。まだ、かなりでかいけどなあ」

結局、MPを残り1まで使ってしまった。

よろめいてしゃがみ込んだリキオーは、懐からMPポーションを取り出す。そしてラツパ飲みすると、不味さに顔を顰めた。

「アネットはそんなリキオーを労るように、額に浮いた汗をハンカチで拭いてあげた。

「もうっ、あんまり無茶はしないでくださいね」

リキオーはアネットに笑みを向けると、表情を引き締めてハヤテに告げる。

「ハヤテ、守護者を頼むよ」

「アオン！」

任せて、とばかりにハヤテが吠える。

そしてハヤテは、マリアに手伝ってもらって、守護者の巨体を背に抱えて立ち上がった。が、さすがに重く、彼の膂力でも耐え切れならしい。少しふらついている。

これで準備は完了だ。リキオーがシュルヴェステルに告げる。

「よし、シュルヴェステル、魔力溜まりに案内してくれ」

「ん？ ……ああ、こつちだ」

シウルヴェステルに案内されてたどり着いたのは、緑色の光で満たされた不思議な泉だった。こんこんと水が湧き出す泉の上で、光り輝くものが飛び回っている。リキオーたちが近づくと、その光は散るように消えてしまった。アネッテによると、それらは光の精霊たちらしい。

小さくなったとはいえ、それでも大きな守護者の体を背負って運んできたハヤテに、リキオーが優しく告げる。

「ハヤテ、ご苦労さま。守護者をここに下ろして」

「わうっ」

ハヤテは守護者を、泉の中に静かに下ろした。

すぐにリキオーは、「ロード」と念じる。泉の力もあり、今度は魔力の消費はなく、守護者はセーブ以前の、元の大きさを取り戻した。

「さて、問題はここからだな。ハヤテ、また手伝って。守護者さまの体を押さえて」

ハヤテが守護者の腰を押さえつけると、リキオーは守護者に跨り、そしていきなり肩に穿たれた傷跡に手を突っ込んだ。

アネッテが驚きの声を上げる。

「マスター？ 何を…マスター！」

その瞬間、守護者の額にある真理の目が開き、体を起こした。

轟々と足元から湧き起こる魔力の奔流。

それとともに瞳を白く輝かせ、長い髪をバラバラと振り乱している。

「ハヤテ！」

「ワオオオン！」

リキオーの要請に応えたハヤテが【咆哮】を放った。これは、狼の魔物特有のスキルであり、テラー効果、つまり麻痺を発生させる技である。

守護者はテラー状態に陥り、真理の目を閉ざして静かに体を横たえた。

その間に、リキオーは血まみれの手で守護者の傷の中から撃ち込まれた弾丸を取り出した。そして、ハアハアと荒い息でハヤテに「グッジョブ」と囁く。

へたり込んだリキオーのもとに、ハヤテが鼻を鳴らして擦り寄り、ペロペロとその顔を舐める。

「さて、俺にできるのはここまでだ。あとはアネッテ、頼むぞ」

「えっ！ そ、そんな、私、どうすれば……」

「指示は出すよ。安心して」

突然、任されてオロオロし出すアネッテ。

リキオーの指示は、次のようなものであった。

まず、守護者に【レストレーション】を何度かかける。状態異常回復だ。弾丸の抽出には成功したが、鉋毒の影響が残っているのは回復するものも回復しない。

そしてそのあとは、【多重詠唱】のスキルを使って、【レジェネイター】を唱える。これは回復二系と呼ばれる呪文で、今のアネットにできる最大の回復呪文だ。

一定量の回復のあと、少しずつ回復を続ける呪文で、【多重詠唱】を使えば効果は四倍になる。普通なら五秒に1ずつの回復量だが、倍の倍で4になる。

それでもさすがに、守護者の体力を癒すには足りなかったが、守護者自身の回復力が、魔力溜まりの泉によって強化されているために、順調に回復していった。

「おお！ なんとということだろう、奇跡か……」

シウルヴェステルは、死んでいるとしか思えなかった守護者が生氣を取り戻すのを見て驚いていた。仕舞いには、両手を組んで祈りを捧げる始末である。

突然、その場にいる者すべての頭の中に、声が響いてきた。

——定命の者たちよ。すべて見ていましたよ。まさか四神の一柱である私の命を救ってくれるとは。特に異界の者よ、ありがとう。あなたには言い尽くせぬほどの感謝を。迂闊にもこの地に破壊をもたらすところでした——

リキオーが顔を上げると、守護者の美女の顔は、静かな光をたたえた眼差しで彼を見ていた。

他の者は守護者の威圧感に打たれてか、頭を下げて動けずにいた。

絶対者の前では、不思議と誰もが動けなくなってしまう。これは火竜公の面前でも経験した光景であった。

渡界者であるためか、ただ一人動くことのできるリキオーが返答する。

「いえ、私にできることをしたまで。すべては私の家族のためです。それにまだ事態は収まったわけではありません」

そう言って、リキオーは遠方を見つめた。

そして、すぐに守護者に視線を戻す。

——そう、わかっているのですね。とても難しいことですよ——

その言葉はリキオーにだけ届けられた。

彼はうなずいて立ち上がる。

まだ事態は半分しか解決していない。

「マリア、ハヤテ、お前たちの出番だ」

選交代とばかりに、リキオーは前衛職の一人と一匹に声をかける。

ここから先の展開は、魔法だけはいかんともしがたい。銀狼団の総力をもって当たらなければ解決に至る道は拓けないだろう。

絶対者のプレッシャーから解かれ、動けるようになった一人と一匹が答える。

「待ちくたびれたぞ、ご主人」

「ばうっ」

マリアが不敵な笑みを浮かべ立ち上がる。ハヤテはフルフルと伸びをして、元気よく吠えた。

2 銃魔士・その2

守護者の雌を蘇生させても、まだ森津波の危険は解消されていない。

今もなお、雄のタングニョーストは、つがいを穢された怒りで暴走しているのだ。

怒りに我を忘れた彼は、その身果てるまで暴れ続け、やがて自壊してしまうだろう。放っておけば森津波は避けられない。

とはいえ、「あなたのつがいは癒したから怒りを収めてくれ」と、彼に直接伝えたところで話を聞いてくれるものではない。

何らかの手段で、彼の怒りを鎮静化させる必要があった。

では、どうするか。

シウルヴェステルが、指を差して告げる。

「リキオー、雄の守護者はあそこだ」

彼の示すほうを見れば、一目瞭然だった。

バリバリと激しい紫電が巻き起こり、鋭い雷光が迸っていた。

さらにタングニョーストは、ゆっくりとした歩みではあるものの、確実にエルフの森へ進んでいた。

破滅の足音が近づいているのを実感し、リキオーが銀狼団に告げる。

「マリア、ハヤテ、頼む。難しい注文をしてすまないが、やっこさんを倒すわけにはいかないんだ。俺が怒りを鎮める方法を見つけるまでの間、守護者を食い止めておいてくれ！」

策はない。今から考えるのだ。

マリアはヘルメットを目深に被り、背にしていた盾を構えながら返答する。

「フツ、ご主人は相変わらず、無理を言う。だが、ご主人の頼みなら引き受けないわけにはいかないな！」

「わうっ、わうう〜ん」

ハヤテも気合い十分とばかりに吠えた。

リキオーは、ゲームの知識から、守護者とやり合うために必要な戦法を伝えた。そして彼女たちを鼓舞するように言う。

「よし、頼んだ！」

「うむ、行こうハヤテ」

「わうっ」

リキオーから願いを託された一人と一匹は、タングニョーストに怯みもせずに向かっていた。

リキオーはマリアたちを送り出し残ったまま佇んでいた。

そんな彼に、シュルヴェステルが不審の表情で尋ねる。

「リキオー、お前は行かないのか？」

リキオーが悪びれることなく答える。

「俺にはまだ大事な仕事があるんだよ。シュルヴェステル、守護者は怒りに我を忘れている状態だ。そんなとき、どうやったらその怒りを鎮められると思う？」

「無茶だ。神の怒りをコントロールする方法などあるはずがない」

すでに諦めているかのようなシュルヴェステルの返答に、リキオーはため息を漏らす。

「それをしなければ、森は終わってしまうんだよ」

リキオーはヤレヤレと頭を振った。

とはいえ、ここで悩んでいる時間も惜しい。何かのヒントを得ようと、雌の守護者を癒している泉のほうへ向き直る。

そこではアネツテが、リキオーに指示されたように守護者を癒し続けていた。

アネツテが心配そうに尋ねてくる。

「マスター、雄の守護者はどうにかなりそうですか？」

「マリアとハヤテで食い止めてもらってる。ちゃんと対策を伝えたから大丈夫だろう。ただし、雄の怒りを鎮める根本的な解決策はまだ考えついていない……それより、雌の守護者はどうだ？」

「今はまだお休みになっておられます。とても動ける状態ではありません」

雌の守護者は、巨体を泉の中に横たえていた。浅いながらも確かに呼吸をしている。

リキオーは頭をポリポリと掻きながらつぶやく。

「雌の守護者さまに説得してもらえれば、一番簡単なんだけどな」

アネツテが何かを思い出したらしく、リキオーに尋ねる。

「そういえば、マスター。守護者さまを治療するときに最初に【レストレーション】をかけるように指示してくださいましたけど、あれはどうしてですか？」

「ん、ああ。あのヒト族が使用していた武器な。その弾なんだけど、毒性が強いんだよ。そんなものが体内にあったから。傷が腐ったりしたら回復できないから……な」

そこまで言って、急に思いつくものがあつた。

（あいつが守護者の肝を与えたかった父親の病気の原因は、銃弾に関係があるんじゃないか）

銃弾は、鉛や銅などの柔らかい金属から作られており、毒性があるのだ。

体内に取り込んでしまうようなことがあれば、中毒症状が出てもおかしくない。

（仮に父親の病の原因がその毒によるものだとして、それを守護者の肝で治せるなんてめちゃく

ちゃんな話だ。あいつが思いつくわけがない)

とすれば、それを入れ知恵したやつがいるはず。

でも、いったいなぜ守護者を殺させようとしたんだ？

今回の事件の真相にたどり着きそうな気配があったが、リキオーはその考えを進めるのを一旦留保すると、アネットに指示した。

「アネット、もう、こっちの守護者さまは大丈夫だ。あとは泉の力と自然治癒でなんとかなると思う。問題は雄のほうだ。マリアとハヤテの支援に向かつてくれ。それとな、二人と戦闘してる雄の守護者も回復してやつてくれ。雄のほうが森津波を起こす危険性が高いんだ」

「はい、わかりました」

リキオーが悪戯いんちっぽく笑うと、彼女もニッコリと微笑んで駆け出ししていく。

さらに彼は、シュルヴェステルにも指示をする。

「シュルヴェステル、狩人パーティにはこっちの守護者の警護に当たらせてくれ。単純に身を守ってやるという意味もあるが、狩人たちも守護者のつがいの片割れが無事とわかれば、少しは希望が見えてくるだろう？」

「うむ、そうだな」

シュルヴェステルはリキオーの言葉にうなずくと、馬車へと走っていった。

指示を出し終えたリキオーは、ヒト族の男が縛られている所に戻ってきていた。

この男に、事態打開のヒントがあると思っただ。

男は縛られたまま、泣き疲れた表情でグツタリとしている。

「おい、お前……名前はなんて言うんだ？ 俺はリキオーだ」

さすがにいつまでも名無しでは面倒めんどうと思い、名前を尋ねてみた。

「レスターだ。な、なあ、守護者はどうなった？ 肝は取ったんだろうな？」

「あん？ まだそんなことを言っているのか。お前の親父さんは俺たちが何とかしてやるから、もう肝のことは忘れる。そもそも守護者の肝を親父さんに食わせたって、治ることなんかないんだからな」

「なんだと！ 馬鹿なことを言うな。ホルガーの言うことは正しいんだ。やつの言ったとおりにしたから、守護者だつて倒せたんだ」

「ほう、そのホルガーっていうやつがお前さんに、親父の病気に守護者の肝が効くって言ったのか？」

リキオーが目を眦すがめて指摘すると、レスターは「あつ」と言っけて口を噤つぶんだ。

「まあ、そんなことは今はいい。それよりも聞きたいことがある。お前、どうやってあの武器から弾を撃ち出してるんだ？」

そう質問をしながらリキオーは、レスターのステータスを確認した。

(なんだこりゃあ！ 銃魔士だとお……初めて見たぞ、そんなジョブ)
一瞬、呆気^{あきけ}に取られる。
それにジョブが設定できているということは、このレスターとかいうやつは冒険者であり、転職の儀式を経験していることになる。

ステータス -STATUS-

- ジョブスキル
【弓 (b)】 【銃 (d)】
- ウェボンスキル
【エイミングショット (c)】
【プラストアロー (c)】
- アクティブスキル
【生活魔法 (b)】
- パッシブスキル
【警戒 (level1)】
【HPmaxアップ (level1)】

ステータス -STATUS-

名前 : レスター (18)
クラス : 狩人
ジョブ : 銃魔士
レベル : 16

LP 27 HP 58 MP 38

力 : 21 耐久 : 20
器用 : 12 敏捷 : 13
知力 : 10 精神 : 11
運 : 11

ボーナスポイント : 10
スキルポイント : 3

ここはエルフの支配する土地。

彼らヒト族がウロウロしていてエルフたちに見つからないはずがない。それに、転職の儀式を受けるための教会は王都にしか存在しない。

エルフたちに見つからずに大森林から出て、教会のある王都まで移動し、決して安くはない寄進料を払い、また戻ってきたことになる。

一介の青年にできるはずがない。

誰か、王都でも顔が利く協力者の手ほどきが必要だったはずだ。その協力者は、先ほど名前が出た、ホルガーなのではないだろうか。何となくそんな気がする。

それと気になるのは、生活魔法のレベルが熟練度の高い（b）という点。おそらく、あの銃から弾を発射するのと関係があるのではないか。

銃のジョブスキルがあっても、弓のウエポンススキルしか持っていないところを見ると、見よう見まねで銃を扱っている段階ということだろうか。

どうやら、いろいろ状況が見えてきたようだ。

レスターが、オドオドとした様子でリキオーに問う。

「な、なあ。本当に親父の病氣治せるのか？ 守護者さまのタタリなんかじゃないのか」

「何を今さら。お前はその守護者さまを手にかけてるんだ。まさか知らなかったとは言わないよな。守護者さまを倒せば、山も森もすべて死んでしまうんだぞ」

「なっ、そんな、こと……」

「森津波、知らないとは言わせないぞ」

さすがにレスターも森津波のことは知っていたようだ。

そして、その原因を自分が作ろうとしていたことに、遅まきながらに気づいたらしい。急にガタガタと震え出す。

「ど、どうしよう、お、俺っ……」

「そっちのほうは俺たちが何とかしてみせるから、お前はさっきの話の続きだ。あの武器から弾を撃ち出すカラクリを教えてくださいたら縄を解いてやる」

「お、俺どうしたらいいんだ。うう、お、教えるから……全部教えるからよう」

レスターはポロポロと語り始めた。

その技術は、やはり生活魔法の一種で、爆破というものらしい。

なんでも、昔この地に落ちてきた大きな火花を見たところから、使えるようになったということだ。

その話から、リキオーはやつと解決策の糸口を掴む。

（ん？ 爆破か……そうか、そうするとアレが使えないか）

まあ、ものは試しということでもやってみよう。そう考えたリキオーは、足元に転がっていた銃や予備の弾を入れた鞆を担いで、レスターを連れて他の銀狼団のもとへ走った。

一方その頃マリアたちは、雄の守護者の相手をしていた。

マリアは、恐ろしい姿をした守護者の前に出ると、シールドを構えて挑発スキル【ハウリングアーツ】を放った。

守りの堅い自分に、敵の攻撃を集中させるためだ。

「来いっ！ ……くっ、来いっ」

しかしタングニョーストは、マリアに意識を向けない。そこで、気合いを相手にぶつけスタンさせるスキル【覇気】を使用し、どうか自分に注意を向けさせることに成功する。

するといきなり、タングニョーストは、獅子の額の真実の目を見開いて翼をはためかせると、バリバリと音を立て、雷撃【サンダーレイン】を放とうとする。

「くうッ……」

盾を構えて衝撃に備えるマリア。

そこにハヤテがやって来る。「アオオーン」と吠えると、彼の【咆哮】のテラー効果により、【サンダーレイン】は中断された。

だがその後、技を中断された守護者が怒り狂い、前足を振り回す。

守護者の大技【メイルストラム】だ。

前足が凶暴に振るわれ、マリアとハヤテに襲いかかった。

「くっ、ううっ……」

「キュウウン」

ハヤテはスキル発動後のインターバルで対応できず、マリア共々食らってしまう。二人は渦巻く強烈な台風にさらされた。

「ハヤテ、【ショートヒール】！」

マリアはすかさず、ハヤテに回復呪文を唱える。

再び守護者は、獅子の額の真実の目を開くと、今度は黄色い光線を放った。

「ぐっ、し、まっ……た」

ヒト族限定でテラー効果を与える四神専用技【ヒューマンエラー】だ。

それを防ぐ手段はハヤテの【咆哮】か、マリアのスタン技である【シールドストライク】しかない。

マリアは魔法使用後の硬直のため発動できない。

彼女が地に膝をついていると――

「ガァア！」

無防備になったマリアを庇おうと、ハヤテがマリアの前に飛び出し、二段ジャンプで空中から爪

を振り立てる。

だが、それは悪手だった。

タングニョーストの尾の蛇がハヤテをその冷たい眼差しで捉えると、石化攻撃が飛んで来たのだ。空中のハヤテには避ける手段はない。

まともに石化効果を受けてしまい、パリパリと不気味な音を立てて、その体は石へと変わっていく。

「ま、ず……ハヤ……」

マリアは、ハヤテに「逃げて」とすら言うことができず、守護者がさらに大技【アブソリュートダート】の予備動作を始めたのを見て、絶望に染まった。

そのとき、助けの手がやって来た。

「止まりなさいッ、【インブロイダー】！」

マリアの横に立ったのは、彼女の姉貴分のアネッテだ。

杖を構えて両手を突き出すと、呪文が放たれた。守護者の足元に黄色い光の柵が完成し、守護者の逞しい足を拘束した。

【インブロイダー】は移動拘束呪文である。これによって、守護者の大技はキャンセルされた。

アネッテはすかさず、状態異常回復呪文をマリアにかけて彼女のテラー効果を打ち消した。さらにハヤテにもかけ、石化を解いた。

「これで、もう大丈夫ね」

「姉さま！」

「わううん」

ハヤテの石化した表面が、パラパラと剥がれ落ちていく。マリアもハヤテも、アネッテの登場に歓喜の声を上げた。

「さあ、マスターが来るまで持ちこたえるわよ」

「うむ！」

「わおん！」

アネッテの参戦に、勇氣百倍の効果を得た銀狼団のメンバーたちだった。

3 銃魔士・その3

雄の守護者の対処に向かったマリアとハヤテ、そして彼らを助けるべく駆けつけたアネッテ。

一方リキオーは、未だに決定的な解決手段を得られずにいたが、ようやくその糸口を掴もうとしていた。

「それで、レスター。お前さんの生活魔法の爆破だが、銃なしでも使えるのか？」

「無理だ。というより銃なしで使えるって何だよ？ やったことないからわかんねえ」

「じゃあ、銃はいい。返してやる。弾なしでも使えるのか？」

「は？ 弾を入れないなら何を飛ばすんだ」

まったく話が噛み合わないの、リキオーはイライラしてきた。

リキオーには、守護者に対処するためにやってみたい作戦があったのだが、それが勘の悪いレスターにどうも伝わってくれない。

「お前さんにこれ以上、守護者を刺激させるわけにはいかない。だから弾は使わない。でも、ものは試した。その爆破を、弾なしで使ってみよう」

「だからッ、無理だ！」

「やってみると言ってるのに、どうしてそう頑かたくなんだ。お前、自覚あんのか？ このまま森津波が起きたら、お前の住むところはなくなるし、お前は森津波を起こした張本人ってことで、エルフに殺されるだけなんだぞ」

「うう……」

リキオーが想定している、とある解決策。

その実現には、衝撃波を撃ち出せる特大のエネルギー、スピードが必要だ。

それを実現できるのは、レスターの生活魔法派生スキルである爆破だけ。

レスターはリキオーに責められ、頭がグルグルしてきて混乱のさなかにあった。

彼は抱え込んだ愛用の銃をしっかりとホルドすると、自棄やけつぱちになつて、スキルを叫んだ。

「うう……うがああっ！ 爆破ッ爆破ア！ 爆破アア！！」

最初の一発は、何かが発生しかけたものの、ヒュウとわずかな音を立てただけで消えた。

が、二発目は弾けたエネルギーが撃ち出された。

リキオーのすぐ隣りを強力な風が突き抜けていく。

リキオーが後ろを振り返ると、立っていた木のど真ん中を撃ち抜いて大きな穴が空いていた。たらりと冷や汗を掻くリキオー。

そして三発目は、レスターもろとも後ろに吹き飛んだ。

撃ち出されたエネルギーは、彼が立っていた地面に大きな裂け目を作って、そこだけ局所的な台風が通り抜けたように大きな溝を生み出していた。

(ヤレヤレだぜ)

リキオーは大きく嘆息した。そうして目を回してぶっ倒れているレスターに近寄ると、彼を引き起こしてやる。

「できたじゃねえか。しかも結構な威力だぜ。これなら使い物になりそうだな」

「へはは……できた。こんなの初めてだぜ。ところで、使い物になるってなんだ？」

レスターはフラフラとする頭を振りながら、リキオーの腕に掴まって立ち上がった。彼の最後の言葉を疑問に感じながら。

「お、俺をどうするんだ？」
「ああ、お前が雄の守護者を止めるんだよ」
リキオーのその言葉に蒼白になるレスターだった。

他の銀狼団のメンバーたちは、タングニョーストを相手に激しい攻防を続けていた。

アネットの参戦により、対処能力を上げ防御力を増したマリアたち。そのおかげで、守護者とはほとんど対等に渡り合っていた。

守護者が、真理の目を開いて【ヒューマンエラー】を放とうとしても、もうすでに予備動作を完全に把握した彼らには通じない。

ハヤテの【咆哮】かマリアの【シールドストライク】、アネットの初級麻痺呪文【バスター】。そのどれかを放てば、防ぐことができるのだ。

そもそも、アネットが守護者に弱体呪文をかけたため、発動率自体が落ちていた。獅子の前足を振るう強力な大技【マイルストラム】も同様に発動率が落ちていた。

守護者の巨大な体躯を使った体当たり攻撃【アプソリュートダート】でさえ、マリアの【ストロングホールド】が決まればノーダメージになる。とはいえ、【ストロングホールド】には永続効果

はなく、インターバル必須の技で、そもそも二十秒しか効果がない。

だが、それが決まらなくても、アネットのレベルの上があった防御呪文【プロテクトヴェール】があれば、ダメージは軽減されるし、受けたダメージも【レジエネイター】で、すぐに回復してしまうことができた。

こうした状況ではあったが、戦闘が停滞しており、膠着状態が続いているともいえた。しかも、守護者は少しずつ前進し、エルフたちの住む森に近づいている。タイムリミットは迫る。

そしてとうとう、そのときが到来してしまったらしい。
絶望のセカンドステージの幕が開く。

「コオオオオオオ」

突如、守護者の全身が震え出し、禍々しい二対の翼を広げ、背に生えた竜の首が甲高い叫び声を上げる。

そしてタングニョーストの体が、金色の光を放ち、大きく膨らみ始めた。

四神の専用スキル【オーバースト】の発動だ。

これは、最終形態である。

今まではノーマルステージ、ここからはハードステージの始まりだ。

ここまでの戦いは、四神戦のプロローグにすぎない。

啞然とする一同。

そこへ、やつとりキオーが到着する。

「よう、みんな。なんとか無事だったか？」

「マスター、あ、あれ、何です？ 守護者、どうなっちゃうんですか」

アネツテは、目の前で展開される守護者の変貌に驚いている。

マリアとハヤテもリキオーを振り返り、彼の到着に喜びの色を見せたが、すぐに目の前で起きている変事に吞まれて言葉を失った。

急に、リキオーが妙なことを尋ねる。

「アネツテ、小麦粉持ってる？」

「えっ、と……マスター？」

「いや、真面目に言ってるから。あるなら全部出して」

リキオーの眼差しに、ふざけているわけではないと感じたアネツテは、インベントリから小麦粉の袋をいくつも取り出して手渡した。

ここでアネツテは、リキオーの背後にいる人物に気づき尋ねる。先ほど木に縛られていた男性のようだ。

「あと、その人、大丈夫なんですか？ その……自由にしちゃって」

「彼はレスタ―。彼に今回のヤマを締めてもらうから」

「ええ〜！」

驚くアネツテを放置して、リキオーは小麦粉の袋を確かめた。

リキオーが想定している作戦を実現するには、閉鎖空間が必要だ。

だが、目の前にはただっ広い場所しかない。

ここに、それを作り出せるのは魔法しかない。

アネツテの持つ魔法なら。

リキオーは、驚いたままボーツとしているアネツテに告げる。

「アネツテ、契約魔法【ウィンドストーム】準備」

「えっ、は、はいっ」

指示されたアネツテは集中し始める。

精霊語の詠唱が始まると、アネツテの足元から魔力の光が漏れ出す。今までの魔法とは行使する魔力の桁が違う。

さらにリキオーは、他の銀狼団メンバーにも指示を飛ばす。

「マリア、盾を構えて、ハヤテはマリアの後ろで」

「う、うむ」

「がうう」

マリアもハヤテも、リキオーのいつにない真剣な表情に何が始まるのかと戦々恐々だ。マリアは言われるままにシールドを構え、ハヤテもマリアの後ろに四つん這いになった。

最後に、今回の主役、レスターに声をかける。

「レスター、用意はいいな？　すべてはタイミングが勝負だ。彼女が魔法を解き放つたら、俺がこの袋を投げ入れる。そして俺がやれと言ったら、爆破を発動しろ」

「ええいつ、ここまで来たら、とことんやってやるさ」

レスターは顔を引き攣らせながら、リキオーに答えた。

「アネッテ、用意はどうだい？」

「……いつでも行けます」

すでにアネッテの周りは地面から噴き出す魔力によって緑色に輝いている。

その目の前では、眩いばかりの金色に輝く守護者が、一歩ずつ前進して、彼らを蹂躪しようとしていた。

リキオーがアネッテに発動を指示する。

「よし、いいぞ。放てっ」

アネッテは発動の最後のピースを嵌めて、静かに瞼を上げる。

そして目の前の空間に、強力な魔力を投射した。

「風の精霊の巫女よ、我、契約により汝の力の代行者となりし者。今、汝の力を現世に示せ！　荒れ狂う風よ、彼の者を滅す刃とならん、【ウィンドストーム】！」

さすがに契約魔法は格が違う。

アネッテが呪文を放つと彼女の上に光が凝縮していき、全身が緑色の美女が姿を現した。おそろく風の精霊の巫女、シルフィーヌなのだろう。

そして、高まる魔力が彼女の指差すほうに向けられると、緑色の風の渦が大きく膨らんで、大気をビリビリと震わせる。

それを見届けたリキオーは、いくつもの小麦粉の袋を放り投げた。

風の渦に触れた小麦粉の袋はズバツと切り裂かれ、たちまち粉が拡散していく。

リキオーは、レスターを振り返った。

「やれっ、レスター！　ぶちかませッ」

「おおおお！　爆破、爆破っ、爆破アア！！」

抱え込んだ銃砲の先を守護者に向けたレスターが、純粋な魔力エネルギーを放出する。

暴風の中で舞う小麦粉の嵐に、エネルギーが直撃すると、その刹那、一気に拡散して大爆発が起きた。

光が、激しい衝撃波となって森全体を貫く。

雌の守護者のところにいたヨラナたちも、閃光と衝撃に驚愕し、思わず地面に手をつけてしまう。馬車の中で震えていた姉妹とユスティーナはその光景を目にしてこの世の終わりかと震え、彼女たちを守るべく立っていたアクセリも呆然とするほかなかった。

そして、その場に居合わせた者たちは――



マリアはハヤテと一緒に後方へと吹っ飛ばされていた。
アネットは風の精霊の加護を得て無事だったものの、目をいっばいに開いて啞然としている。
爆破スキルを放った張本人のレスターはゴロゴロと地面を転がって、藪やぶの中に頭から突っ込んで
伸びていた。

リキオーはというと――

「ふう、酷い目に会ったな。ふえー、こりやすごい」
彼は、分身体を生み出すスキル【心眼しんがん】によって衝撃波のダメージから逃れていた。それでもだ
いぶ吹き飛ばされてしまったが。

もっとも、彼にはまだ仕事が残っている。

リキオーは、爆発の衝撃波の過ぎ去った爆心地に近づく。

そこには、彼ら同様に放心状態になっている守護者がいた。背中に生えた竜の首は口をだらしな
く広げ、尾の蛇はくるくると丸まってしまっている。

その体に纏っていた炎獄の炎はない。ただ、獅子の顔だけは正常な意識を有しているように見
えた。

リキオーが試したのは、粉塵爆発かぶちである。

守護者を正気に戻すために、大きな爆発を使ったのだ。

いわゆる、ショック療法というやつである。

リキオーは元いた世界で、炭鉱で石炭の塵が爆発したという事故を、小麦粉で再現する動画を見たことがあった。それを今回マネてみたのである。

守護者の【オーバーブースト】は、爆発の影響で効果を吹き飛ばされていた。

HPをだいぶ減らしてはいるものの、アネッテが戦闘中に回復し続けていたのが効いていたのか、まだ生きている。

リキオーは彼の前に跪いた。

「守護者、タングニヨーストさま。お怒りはわかります。ですが、どうか鎮めてはいただけませんか。あなたのつがいの片割れであるタングリスニルさまは私どもが介抱して、今はあちらの泉にてお待ちになっておられます」

タングニヨーストは、獅子の冷たく射るような眼差しで、リキオーをしばらく見下ろしていた。やがて念話を発する。

——ヒトよ……お前たちのしでかしたこと、ゆめゆめ忘れるでないぞ。今は、お主の気概に免じて引き下がろう。タングリスニルのことは礼を言わねばなるまいな——

その場にいた者たちの心の中に守護者の言葉が響く。

そして、守護者は白い光となって消えた。

泉のほうで驚きの声が上がった。向こうでもきつと雌の守護者が光となって消えたのだろう。

「ふう、なんとか乗り切ったな。さて、みんな無事かなあ」

リキオーが呑気に振り返り、銀狼団や他のエルフの様子を確かめようとすると、何者かが彼の目の前に立ち塞がった。

「ま、ますたーああ！ 何をしたんですかああ」
アネッテである。

いつもの彼女でなく、半分壊れた感じだ。

まあ、目の前であんな大爆発を見てしまって、平常でいられるほうがおかしい気もするが。

「どう、どう、お、落ち着いて、アネッテ。無事だったんだね。やっぱり風の契約魔法のお陰だね、凄かったね！ 【ウィンドストーム】。やっぱり契約魔法は強いね」

リキオーは止まらない冷や汗をダラダラと掻きながら、すごい形相で詰め寄ってくるアネッテを宥めすかす。

「それよりもさ、みんな無事だったか確かめない！ ほら、あの、ね？」

ガシツと首根っこを押さえられ、リキオーは冷や汗が止まらない。

しかし次の瞬間、アネッテは怒りを鎮めると、肩を震わせて泣き崩れた。

「マスターのバカア。怖かったんですよ。私の起こした魔法であんなことになるなんて……」

リキオーはようやくアネッテの嵐が去ったのを知ると、彼女を抱き寄せた。そして、優しくその

背中を撫でてやる。

「いや、アネット。アレは君の起こした魔法が原因じゃないから安心して。詳しいことはあとで説明するからね。ほら、マリアとハヤテが心配だろ」

「うう……はい」

アネットは少し気分が晴れたのか、徐々に落ち着きを取り戻した。が、リキオーを見る目はまだジト目のままだった。

マリアとハヤテはすぐ近くの藪の中で目を回して倒れていた。

こちらも怪我はないようで何よりだ。近づいてくる主にすぐに気がついて、マリアは尻餅をついたままリキオーを見上げていた。

「マリア、無事だったな。驚いたろう」

「ご主人、あれは何なんだ。姉さまの魔法もすごかったが、あれはご主人の起こしたものののだろうか？」

「そうだな。あれは俺とレスターが起こした。いちいち説明するのが面倒だからその件はまたあとでな」

リキオーはマリアの腕を掴んで引き上げてやる。

マリアは彼の腕に掴まって起き上がると、耳元で「よくやったな」と囁かれ、満足そうに微笑んだ。

マリアはヘルメットを脱いで、汗で張り付いた前髪を掻き上げる。そして、フウツとため息を吐き、アネットの元へ歩いて行った。

ハヤテは放恣に腹を見せて、目を回していた。バンザイをするみたいなユーモラスな格好に、リキオーはブツと笑ってしまう。

鼻をギュッと摘まんでやると、ハヤテは「ほうっ？」と吠えて目を覚ました。リキオーは笑いながらハヤテを抱き締めて、よしよしと頭を撫でてやった。

ついで、リキオーは今回の立役者であるレスターの元へ歩いて行った。

レスターは最初、目を回していたのだが、自力で気づいたようだ。リキオーが彼に話しかける。

「よう、レスター、無事か」

「ああ、お陰様でな。俺はこれからどうなるのかな。やっぱりエルフに殺されるのか？」

「さあな、殺されないとは思いますが、わからんな」

レスターは呆然としてリキオーを見ていた。

やがてリキオーたちはヨラナたちと合流し、馬車のところまで戻ってきた。

当然のようにエルフ側から、レスターを責める意見が出る。

「おい、そのヒト族が守護者を！」

「だが、彼がいなければ今回のことは解決できなかったのも事実だぜ」

立ち読みサンプル
はここまで

リキオーが弁護するも、エルフたちは彼を許すつもりはないようだった。だが、意外な人物から助け舟が出る。

「今回のことは、単に偶発的な事件ではないと考えられる」
シュルヴェエステルだった。

彼はリキオーの行動の一部始終を見ていた。リキオーから指示され、雌の守護者のところに狩人たちを誘導すると、リキオーのあとを追っていたのだ。

「そうなのだろうか？ リキオー」

「ああ、そうだ。誰かが森の破滅を計画した。その者がレスターに、守護者の肝を取れば彼の父親の病気を治せるという出鱈目を吹き込んだ。そして、そいつはエルフの人攫いと関係がある人物だろうな」

ザワツと場が騒然とする。

「何だと、それは確かなのか、リキオーとやら」

ヨラナがリキオーに詰め寄る。だが、リキオーは肩を竦めただけだ。

「まだ確証はないがね。大森林に隠れ住み、お前さんたちエルフの狩人に見つからずにいた者たちを自由に動かすほどの連中だ。関係がないはずがないだろう」

ヨラナはフツとため息をつくど、怯えるレスターの顔を横目に告げた。

「ふむ。いいだろう。そいつのことは見逃してやる。ただし条件付きだが。それは別にして、リ

キオー、そなたには感謝を」

そうして頭を下げると、さらに言葉が続けた。

「守護者を無事救ってくれた、その手腕は尊敬に値する。そなたは我らエルフの恩人だ」

このヨラナの行動に、周りのエルフたちがアワアワし出した。

ヨラナほどの身分の者が、ヒト族に頭を下げたことに困惑しているのである。

「マスター」

アネッテは自分の主人が里の重鎮に認められたことを、我が事のように喜んだ。いろいろ驚かされることは多いが、やはり信じて付いてきてよかったと思うアネッテであった。

それからリキオーはレスターの家に向かうことにした。

彼の父親の病を治すという約束を果たすためである。

彼らの住まいがあるところは、大森林の中にあつて珍しく岩肌が露出した場所だった。とてつもなく大きな樹の根が転がっており、レスター親子はそこに家を作っていた。

一緒にやって来たのは、アネッテ、そしてシュルヴェエステルだ。

彼の隠れ家を目にしたシュルヴェエステルが、感心したように告げる。